

〔9〕ベジヤールの壁

～バレエ『ニーベルングの指輪』～

1990年11月9日 東京新聞 夕刊

「ザ・カブキ」「ピラミッド」と、このところ過去の壮大な叙事詩のバレエ化を手がけているベジヤールだが、それがワーグナーの「ニーベルングの指輪」となれば、見に行く方もいささか気が重い。ベジヤールならではの何かがあるに違いないとは思うものの、あの四夜にわたる舞台芸術の超大作を、いったいどう料理しようというのか。構想三十年とはいえないや、そう聞けばなおのこと、ただごとではない。しかし、そのような不安にみちた期待を、バレエ『ニーベルングの指輪』ははるかに上まわるものだった。

開幕直前、息苦しいほどに緊張した暗い室内にピアノの音が響く。試し弾きをしているような、なんとも気楽な弾きかた。幕が開くと、そこは広い室内。左手は高い窓を背にして中二階のバルコン。舞台奥に大きな鏡があって、前には移動バー。そして鏡の背後に、天までとどくかと思われる焼けた石の威圧的な壁。

右手にはテープレコーダーが一台。その横に座っている男が、これから演じられる場面の簡略な内容を、また時には台詞を語る。それに導かれるように、はじめはピアノで曲が流れ、踊りが始まり、やがてテープレコーダーから流れる楽劇「指輪」の音楽とともに、各場面は充実し、完成する。

台詞からピアノスコアへ、そして楽劇へというこの過程は、ワーグナーが『指輪』を作ったときの方法であって、その方法そのものを、ベジヤールはバレエ『指輪』にしたのである。楽劇に耳を傾け、これを理解し、解釈し、自分の感じ方を加え、そし

〔9〕ベジヤールの壁

～バレエ『ニーベルングの指輪』～

1990年11月9日 東京新聞 夕刊

て消化して自分のものとして表現する、その研究的かつ創造的な営みがすなわちバレエ『指輪』なのであり、そのようにして私たちは、ワーグナーの『指輪』を見ると同時に、これを包み込むベジヤールその人の舞踊世界を見ているのでもあった。

とすればこの装置もまた、ベジヤールの創造的な内面の空間化に他ならない。古めかしいバレエのレッスン場で、鏡を前にして自分を確かめ、自分を磨き、自分を造型していく舞踊作家。立ちほだかる壁はその内面の壁、現代の舞踊にのしかかる過去の完成された舞台芸術という壁、そして今とりくんでいる『指輪』という壁である。

これはかつてラシーヌやコルネイユがギリシャ悲劇をもとにフランス古典主義文芸の精華を作り上げた、それと同じ読み直しの作業であって、考えてみれば文化というものはいつもそのようにして過去の遺産を受け継ぎつつ、同時に新しい生命を獲得するものなのであるが、しかしベジヤールの試みは単にそれに止まらない。自らの創造的営みそのものを作品とするという方法は、人間の関心がかつてないほどに自己の内面世界へと向けられた二十世紀に特有のもので、文学で言うならば作品の創作過程をテーマにした「小説の小説」、映像芸術で言うならばフェリーニの『8 1/2』がそれに当たる。

ではベジヤールが解釈し、表現した『指輪』とはどのようなものであったか。淡彩のレオタードにタイツを身につけた「ラインの黄金」の神々は、それぞれの特性を輝くばかりに踊りわける。翼のある黒

〔9〕ベジヤールの壁

～バレエ『ニーベルングの指輪』～

1990年11月9日 東京新聞 夕刊

い兜に黒革の潜水服といったいでたちの九人のワルキューレは、細身の体に槍をかざし、あるときは盾に身を隠して鋭い岩と見え、またある時は舞台いっぱいに跳躍して閃く稲妻と見え、女性的にして戦闘的なるものをあますところなく踊りぬいて目を奪う。そして楽劇の歌声に合わせてブリュンヒルデ（カタージェーナ・グダニェック）が踊る時、その動きは、ワーグナーの音楽のきらめきや深みを、あたかも砂金から純金を洗い出したように、感じさせてくれるのだった。森の中のジークフリート（ヨーラン・スヴォルベリ）の踊りからは、針葉樹の香りと葉むらをこぼれる陽の光が感じられて、思わず身ぶるってしまう。緋色の頭をつけ、屈伸のきいた回転と跳躍で全篇の狂言回しを演じる火の神ローゲ（ジル・ロマン）や、異形の肉体と精神のミーメ（ミシエル・ガスカール）もそうだし、ジークフリートとブリュンヒルデの出会いのデュエットもそうだが、それぞれの踊り手がその役どころとその場面の意味を、これほどこまやかに踊り分けているのを、これまでのどの舞踊作品においても、またベジヤールの作品においてさえも、私は見たことがない。そしてまた人間の肉体の美しさにこれほど感じ入ったことも、かつてなかった。ベジヤールの舞踊という言葉は本当に、なんと明晰で、繊細で、そして雄弁なのだろうか。これはまさにフランス知性によるドイツ精神の読み直しであって、彼がそのように『指輪』について語るのを見ると、それによって開かれた目で、改めてワーグナーの楽劇をしっかりと見直してみたい

〔9〕ベジヤールの壁

～バレエ『ニーベルングの指輪』～

1990年11月9日 東京新聞 夕刊

という気にもさせられるのである。

そして終幕、ものものしい装束の神々がバルコンから見下ろすなかでジークフリートが死に、神々もろともバルコンが崩れ落ちると、黒い石の壁の亀裂が大きく割け、床に座りこんだ出演者全員の頭上に、壁の彼方と高窓から朝の光が差す。ブリュンヒルデの語り「自ら選んだ、平安で、最も神聖な国へ、生まれ変わることによって救われて、今、すべてを知った私は、移って行くのです」それを私は、舞踊にかけるベジヤール自身の思いと重なるものとして聞いた。終末思想に彩られた全篇は、最後にいたって希望の光を帯び、こうしてバレエ『指輪』は楽劇『指輪』を越えたと見ることもできるように思うのである。終曲に流れた『パルシファル』の主題は、その暗示ではなかったろうか。見終わった私は、なぜか「人生は短し、されど芸術は長し」という言葉を思い出していた。

今回の日本公演を機に完全版となった『ハムレット』（主演ジル・ロマン）も、十七世紀の音楽と一九二〇年代のブルースが交錯する中で、屈折した心理が現代的な肉体造形として色鮮やかに描かれ、良い作品だった。たしかにベジヤールは今も前進しつづけている。